

令和4年度北海道教育大学札幌校
教員養成課程帰国子女・社会人入試小論文 解答例

問1 (40点)

子どもの貧困は、栄養・食生活、地域資源へのアクセス、雇用、家族や保護者のストレス等の問題、地域環境の劣化、近隣モラル・規範の低下などを介して、恵まれない社会経済状況下の子ども達の成長と発達に影響を及ぼすと考えられ、その物質的欠如が子どものスティグマとして焼き付くと、屈辱や恥辱となって現れること、それが子どものネガティブな自己イメージや無力化を招き、子どものシティズンシップや声を奪ってしまうこと、それらの帰結として人権の否定を生じさせることになる。このような問題は、現代の子ども達の生活習慣の乱れ、いじめ、不登校、児童虐待、暴力、自殺、抑うつなどの危険行動につながる。危険行動に関わる心理的要因として指摘されているネガティブな自己イメージは、低学力・低学歴ともかかわる問題である。子どもの貧困は、子どもの身体に負の影響を与え、子どもの幸福、学習・学力、就労やキャリア、健康にも影響を及ぼすと言える。(400字)

問2 (60点)

健康とは、肉体的、精神的、社会的に完全に良好な状態であって、単に疾病や虚弱でないことではないと定義されることから、健康格差は、経済状態、教育水準、居住地域など様々な社会的な原因から生じると考えられる。現在子どもが帰属する家族・家庭や地域社会は、地域差や、教育・学力、体力、歯科保健など、幾つかの健康関連事象においては二極化傾向が見られ、様々なルートを介して子どもの健康に影響し、健康格差が拡大しているとも考えられる。低所得の人ほど「健康に悪い生活習慣を改める」「専門的知識のある医師などに相談すること」など健康に対する意識のほか、時間的な余裕や経済的余裕がないため、良くない生活習慣をしている傾向があり、このような環境要因が子どもに大きな影響を与える。例えば、乳幼児の「虫歯の健康格差」は、成長とともに拡大する傾向であり、乳幼児期に適切な治療を受けていなかった高齢者は歯が少ない結果となっている。このように一生涯にわたって関わることになる子どもの健康格差は、子どもの自尊感情・自己肯定感の低さや学校における疎外感など心理的影響に大きく作用し、「意欲の格差」やその源泉である興味の差、「希望格差」さえも生み出すと指摘されている。

子どもたちの健康保持に向けた学校における対策として、例えば保健学習を通じて生活習慣を確立するように食事・運動・睡眠の大切さを指導することが挙げられる。また、日頃から子どもの様子をよく観察し、積極的に関わることで、子どもの些細な変化にも気付くようにしたり、養護教諭やスクールカウンセラーと連携し、子どもの心を支えたりすることも考えられる。そして、スクールソーシャルワーカーも活用しながら、子どもの健康を子どもや家族の責任とするのではなく、子どもやその親を社会的孤立から解消するコミュニケーション支援の構築や、子どもの健康のための地域連携の整備・充実を図る必要がある。(795字)